った。
本書の最大の魅力は、明快
主張、独創的な構成、絶妙
刊行タイミングの3拍子す
てがそろったことである。
主張はいたってシンプル
。〈精神病院は暴力の施設
ある〉、これに尽きる。だ
「施設」を（日本の用例
）単なる建物や設備の意味
と早合点すると、バザーリ
の真意を読み取れない。彼
主眼は、施設の「施」、す
わち「施す者」が「施さ
る者」を安定した上下関係
留め置く構造の徹底解明に
る（第1章　暴力の施設）。
とういうことか。家族、学
、工場、大学、病院はいず
も「権力を持つ者と持たな
者の間の明白な分断」で成
立っている。学校の教師や
院の医師は、教育や治療と
う目的を実現するために、
定の力の行使を社会から許
れた特別な存在（バザーリ
の用語だと専門技術者）で
る。
もし施される者が裕福であ
が、社会的な地位や権利を
っていれば、施す者との上
関係を正すチャンスを握る
とになる。だが金も地位も
利もない患者はどうなる
その瞬間、施す者が振る
力の行使は「決定的に言い
りになる人を前にして、そ
努を左右できる者が行う暴
」と化す。思えば施設の
設」は、部首の「ことば」
つくりの「腕力」が合体し
字義である。〈暴力の施
とは、ことばによる隠ぺ
（例えば「精神科病院は治
施設だ」）と暴力の行使を
して、施す者が施される者
打ち立てる揺るぎない支配
係のことだとわかる。何も
神医療に限らず、社会のあ
ゆる施す―施される関係は
〈暴力の施設〉に変質する可能性をもつのだ。

ではこの不条理をどう打開するのか。本書の独創的な構成に糸口があったように思う。『否定された施設』はイタリアの名門出版社エイナウディのシリーズの一巻として刊行された。レヴィ＝ストロース、ロラン・バルト、デヴィッド・クーパー、アーヴィング・ゴッフマンなど錚々たる顔ぶれが勢揃いの叢書のなかで、バザーリアたちの本は高尚な学術書の流儀から思い切りはみだした前例のない作品だった。

まず映像作品のようなドキュメンタリー的序文で始まり、当事者や医師へのインタビュー、ライフストーリー、医師と患者が入り乱れて発言する全体会議の議事録、業務日誌の断片があるかと思えば、硬派な学術論文も収録されている。「ここにいるくらいなら死んだほうがまし」と思っていた入院患者たちが、〈暴力の施設〉の生き証人として、みずからの声で語る。総勢38名もの人物がほぼ実名で登場する編成は、まるで歌劇や演劇の大合唱さながらの迫力であり、そこではバザーリアの声でさえも、怒りのポリフォニーの一旋律として相対化されている。この多声的な運動が〈暴力の施設〉に風穴を開けたのである。

1968年の刊行という時期も絶妙だった。とりわけ社会変革を望む若者たちの心をわしづかみにした。冒頭のサルトルの言葉にあるように、この目で現場をみようと多数の若者がバザーリアの下へ押し寄せた。『否定された施設』は学生闘争のバイブルになり、バザーリアは68年世代のシンボルになった。本は商業的にも大成功を収め、当時のベストセラーになった。

ただし順風満帆とはいかなかった。本はたしかによく売れたが、かといってよく読まれたわけではなかったようである。賛同者の多くは衝撃的なタイトルをみただけで、本を理解したつもりになった。精神医療の権威たちは過激な題目をみただけで本を開こうとしなかった。崇められるか、黙殺される本として、肝心の中身の吟味はなおざりにされたのである。

刊行直後、本書が単なるスローガンに化すのではないかという危機感を抱いたバザーリアは、「せめて私だけでも、新たな行動に向けた一歩を踏み出す」と述べている。「否定」の次に何が来るのか。その答えはトリエステで提示されることを今の私たちは知っているのだが、当時はバザーリアでさえ暗中模索だった。よって本書は、精神病院の廃絶に向けて後戻りできない一撃を加えた報告と記録であり、次の段階にむけた跳躍台として位置づけることができるだろう。

本訳書が日本で刊行される意義は何だろうか。私たちは今なお〈ゴリツィア以前〉にいるのかもしれない。かつてと比べて精神病院の建物や設備は最新鋭になったけれども、心病む人々の生活と人権をないがしろにする有形無形の〈暴力の施設〉は残存するからである。むしろ見えづらい暴力が増大し、施設的な関係はかつてより複雑化しているともいえる。

半世紀前のバザーリアたちの怒りの熱量を、いまの日本の私たちがどれだけ受け止めることができるだろうか。

（東洋大学国際学部准教授）

# 日本人はいつからどのような経緯で「黄色」に分類されるようになったのか

## アジア系へのヘイトクライムが相次ぐコロナ禍の今日、是非読まれるべき一冊

**廣部泉**

ロテム・コーネル 著
滝川義人 訳
▶**白から黄色へ**
ヨーロッパ人の人種思想から見た「日本人」の発見―1300年～1735年
1・31刊　A5判784頁　本体7000円
明石書店

米国に来たばかりで英語もうまく話せない移民でも、いわゆる「白人」の外見なら、黙って立っていればいきなり「お前はアメリカ人か」と問われることはないだろう。一方、日本をはじめとして東アジアから移民した人々は、しばしば「どこから来た」と聞かれる。何世代も前に米国に移民し、米国生まれの米国育ちで英語しか話せなくともである。「生まれも育ちもサンフランシスコだ」などと答えると、相手は不満顔で「で、どこから来たんだ」と聞き返してくる。これは米国のアジア系市民が、その外見からいつまでたっても米国社会でよそ者と見られるということを語るときによく例に出される話である。

ではこの場合、よそ者と見られる外見とはどのようなものだろうか。「黒人」「白人」といった分類でいくと日本人は「黄色人種」に分類される。どうも「黄色い」外見が気に障るようだ。しかし、絵の具の黄色のような肌の色をした人間は、アニメの世界には存在するが、現実の世界には存在しない。また、日本人で色白と言われる人の肌の方が、今日、「白人」と分類される人の肌よりも白い場合は珍しくない。では、いったいいつからどのような経緯で日本人は「黄色」に分類されるようになったのだろうか。それが本書の著者が取り組んでいる極めて興味深い問いである。

著者は、ヨーロッパ人によるありとあらゆる日本に関する記述を渉猟している。それは、書かれた言語だけみてもポルトガル語、ラテン語、スペイン語、ドイツ語、英語、日本語、中国語など、様々な言語の資料に及ぶ。それらの分析から、本書が扱う時期を「一三〇〇年から一五四三年」、「一五四三年から一六四〇年」、「一六四〇年から一七三五年」といった具合に三つに区切っている。

まず、第一局面として一三〇〇年から一五四三年が扱われる。この時期にはヨーロッパ人はまだ日本には直接訪れてはおらず、伝聞や想像によって日本が描かれている。代表的なのがマルコ・ポーロで、彼は日本を一度も訪れたことはない。『東方見聞録』の中で、ジパングという島について言及し、その住民は「肌が白く、文明的で、器量がよい」と書いている。ポーロは現代的な意味で「肌が白い」という言葉を使ったわけではないが、日本人に対して差別意識がなかったことが読み取れる。この時期にはヨーロッパ人で「ジパング人を観察したものは、ひとりもいない」。ヨーロッパ人にとって日本人は想像上の存在でしかなく、そこには軽蔑の意図は含まれていない。

第二局面は、ポルトガル人が日本人に接触した一五四三年から、江戸幕府が宣教師を追放しヨーロッパ人との接触をオランダ人に限るようになった時期である。この時期は、カトリックの宣教師や英蘭の商人とに限られてはいるものの、ヨーロッパ人と日本人の間に濃密な接触があった時期である。彼らは日本や日本人についての多くの報告書を作成している。その中で、日本人は「文明的」、「戦闘的」、そして「肌は白」と書かれていた。それは自分たちの理想像に近かった。ルイス・フロイスのように日本人との相違について書くものもあったが、そこには自分たちよりも劣っているとは書かれてはない。この時期、身体的特徴は勘定に入れられず、軍事力と文明のレベルによって対等と日本人は見られていたのである。

第三局面は、一六三九年に鎖国政策によっていわゆる「キリスト教の世紀」といわれる第二局面が終了してから、スウェーデンの博物学者カール・フォン・リンネが、『自然の体系』の中で日本人をヨーロッパ人と異なる「別種」に分類するまでである。不吉な影が忍び寄る過程が描かれる。この時期、ヨーロッパは軍事力を強め、非ヨーロッパ人を見下すようになっていった。その文明と軍事の力に、ノーと言える数少ない国が日本であった。だが、非ヨーロッパ人を下に見る人種概念の自国に対する適用を、日本は遅らせることはできたかもしれないが、免れることはできなかった。リンネが自然界を分類したとき日本人も他のアジア人同様にヨーロッパ人とは劣ったものとして分類された。

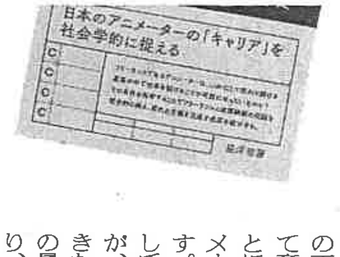
本書はここで終わるが、実は著者の時代区分は一七三五年以降も、「一七三五年から一八五四年」、「一八五四年から一九〇五年」と続いている。それらは本書の続編で扱われる予定である。一七三五年に出されたリンネの分類は、他の学者たちによってより影響力のあるものへと変化し、日本人は劣等な黄色人種となっていく。そして一八五四年には開国することになった日本は、近代的兵器を備えた列強の脅威にさらされる。それが、日露戦争でロシア軍を打ち負かし、世界を驚かせることで、新たな段階を迎えることになる。本書のおもしろさを考えると、続編の出版も楽しみである。

原著のおよそ半分に及ぶ丁寧な注、索引、文献表も訳出されていることにも付言したい。往々にして翻訳の段階で省かれることの多い部分であるが、それらが訳出されていることは本書の価値を大きく高めており、訳者と出版社に敬意を表したい。

著者も、「本書は、誰にもましてまず日本人読者のために、書かれたものである」と書いている。アジア系へのヘイトクライムが相次ぐコロナ禍の今日、是非読まれるべき一冊であろう。

（明治大学政治経済学部教授）

思想




日本のアニメ産業に対する
的注目を背景にして、読
の多くは、本産業における
働環境問題について、多少
とも耳にしたことがある
も知れない。にもかかわら
多くの人材を惹きつけて、
的にも評価を受ける作品
生み出し続けている現状
彼ら彼女らに対するやり
搾取によって成り立って
るとの指摘がある。本書
このような見方に対して
を呈し、画面上の動きのある画を主に描く仕事を担って産業の中核を構成する職種であるアニメーターが、どのような内的論理でもって働き続けてきたのかを、歴史的な産業特性の変容も踏まえながら、描き出している。

著者達が主に注目するのは、本産業の特性が確立された後に起きた、二度の産業変容の時期である。ここでいう特性とは、テレビアニメ市場が成立した1960年代に確立して今もなお根強く残っている、受注産業であるがゆえの不安定性と、その結果として産業内で一般化した作品ごとにフリーランス化したアニメーターを雇用する慣行を指す。この状況を所与のものとして生じた、第一の産業変容が、1970～80年代に起きたアニメブームによる市場の量的拡大と質的多様化であり、第二の産業変容は、2000年代以降に生じている制作技術へのデジタル技術の導入である。これらの歴史が、産業全体の動きとそれに対するアニメーターの反応を軸にして丹念に紐解かれていく。

本産業の組織構造は、ネットワーク型であるがゆえに、非公式なコミュニティが存在する。フリーランス化したアニメーター達は、相互能力評価と共に、仕事の融通による助け合いも行う。こうしたコミュニティが確立したのは、第一の産業変容を経た1980年代のことであるとして、第二の産業変容期には、そのコミュニティの弱体化の兆しが示唆されている。つまり、アニメーター達が労働を続ける内的論理の形成には、コミュニティの存在が果たす役割が大きく、分断された個々人がそれぞれ独自に持っている「やりがい」を企業側が一方的に搾取するような環境下にはなかった。しかし、それを可能にしてきた基盤たるコミュニティの揺らぎこそが、実は本産業にとってより本質的な課題となってきていると指摘している。

本書の学術的貢献は多岐に渡るため、あえて評者が注目した点に絞って述べたい。ただ、アニメ産業・コンテンツ産業・フリーランス労働などに関心を持つ読者にとっては間違いなく一読の価値はあるため、評者が触れていない点などは、ぜひ各自で目を通して欲しい。

まず第一に、アニメーターの内的論理の形成を産業史との関係性から切り込んだ点が重要である。アニメーターに限らず、いわゆるクリエイティブな職種の労働規範は標準的な労働者のそれとは明らかに違いがあることが知られている。したがって、ステレオタイプ的な切り口を避けて慎重に当事者の論理を探る必要性は、松永がこれまでの研究でも強調してきた点である。この論理の形成を、インタビュー時点の産業構造などに基づく静態的な説明ではなく、歴史的経緯を踏まえて動態的に活写しえたのは、1980年代のアニメ消費者の実態を主に研究してきた永田との共同作業の成果であろう。

第二に、まさにその1980年代のアニメ産業の実相を詳述した点は、アニメ産業史の充実にとって待望の成果であったといえる。これまで、日本のアニメ産業の歴史的研究は、産業確立期といえる1970年代前半頃までを対象にしたものと、アニメ産業に対する社会的注目が高まっていった1990年代後半以降のものは、比較的充実していた。しかし、1980年代を中心とするそれらの端境期について、少なくとも学術的には断片的な情報提示に留まってきた。その空白を埋めた本書の貢献は大きい。

最後に、本書の内容でいささか気になった点に触れると、堅実で丹念な調査に反して勇み足とも思える記述の存在である。

たとえば、1980年代にアニメーターコミュニティが成立したと指摘しているが、1960年代には既に何らかのコミュニティは成立していたはずである。なぜなら、その時期にはフリーランスが大量に発生して複雑な分業体制が構築されていたため、そのような体制が円滑に機能するには、著者達も触れていたように、フリーランス同士のコミュニティが肝要なはずである。したがって、1980年代に、それまでのアニメーターとは性質の異なる人々によるコミュニティが成立したのは事実だとしても、それは既存コミュニティの変質もしくは新たなコミュニティとの並立として述べられるべきではないか。

また、アニメーターがフリーランスになる論理やその労働規範と、アニメ産業全体におけるフリーランスのそれらは必ずしも一致しないはずであるが、前者と後者の区別が曖昧な箇所が散見されるように思える。アニメ産業におけるフリーランスの典型がアニメーターであるのは間違いないものの、それと対比される存在は、正社員的存在としての制作進行という管理系職種のみであり、フリーランスも存在する他の職種の存在感が薄い。一例として、画を描く職種という点ではアニメーターと同じだが、画面上でキャラクターの後景に存在する動かない絵を描く「背景」という職種も存在し、そこでは企業に所属する人々の方が多くフリーランスは相対的に少ない。その差異は何に起因しているのか、評者の知る範囲内では当事者達もよく分からないようである。ゆえに、アニメ産業全体のフリーランスの内的論理を論じるためには、他職種に対する調査と職種間の比較検討が必要ではないか。

よって著者達には、その丹念な調査の射程を、違う時代や職種にまで広げることを期待したい。その上で展開される議論には、今回以上に豊潤な情報と重厚な説得力が満ちていよう。

（明治学院大学社会学部教授）

詩と思想 7
好評発売中　定価1430円（税込）
作品特集 高祖 保
〈対談〉外村彰　青木由弥子
〈評論〉外村彰　萩原健次郎　國中治
江田浩司　澤村潤一郎　大塚常樹
宮崎真素美　島田龍　扉野良人
〈エッセイ〉漆原正雄　木下裕也
高嶋樹壱　田中さとみ
重光はるみ　友森陽香　清須浩光
附・アルバム／略年譜／ブックガイド
〈巻頭言〉杉谷昭人　〈詩人論〉坂本正博
〈連載エッセイ〉長谷川忍
〈この土地に生きて〉万里小路譲
〈舫船を泊めて〉関口裕昭
〈わが詩の源流〉壺阪輝代　山本泰生
川中子義勝
〈詩誌評〉後藤大祐　〈詩集評〉斎藤恵子
〈投稿選評〉清岳こう　尾世川正明
土曜美術社出版販売
〒162-0813 新宿区東五軒町3-10 電話03-5229-0730